



図 13 GRIP プログラム専用の Google Classroom の授業画面の一部

メタバースプラットフォーム oVice のスペース構築

メタバースプラットフォームは架空の共同学習室として使用するために GRIP プログラム専用スペースを契約し、開設した。これについては別の項で詳述する。

2-3. カウンターパートとの連携

先に述べたとおり、この GRIP プログラムでは、2022 年度はトライアルとしてシンビオシス国際大学(インド)と千葉大学(日本)での学生交換、2023 年度はこれにレスター大学(イギリス)、さらに 2024 年度はモナシュ大学(オーストラリア)が加わり、参加学生人数も最終年度である 2026 年度には派遣・受入各 40 人、計 80 人となる予定としている。

2022 年度はシンビオシス国際大学とは実際の学生交換の調整・連携を行い、レスター大学ならびにモナシュ大学とは 2023 年度以降の学生交換のための調整を行った。

以下、カウンターパートである、各大学との GRIP 開始までの交流の経緯と 2022 年度の調整・連携活動状況について記述する。

2-3-1. シンビオシス国際大学（インド）

これまでの本学/部局との交流の経緯

シンビオシス国際大学（SIU）とは、シンビオシス国際大学国際教育センター（SCIE）を介して、同大学看護学部（SCON）ならびに千葉大学看護学部との間で、教育プログラム開発・提供のエージェントである SGS の仲介により、2019 年より国際交流を開始し

た。この学生の交流プログラムは、千葉大学看護学部の自由科目である Global Health and Nursing II(2 単位)に該当するものであり、日本、インドそれぞれにおける社会文化経済的背景と看護・医療との関連を主題とする国際交流プログラムである。2019 年には千葉大学看護学部より、7 名の 2, 3 年次学生が現地に実渡航し、実際に現地の医療機関やシンビオシス国際大学看護学部において、施設見学の他、保健医療システムや看護実践、看護教育の状況について、講義を受け、同大学看護学部教員ならびに学生との意見交換などを実施した。特にこの SIU との交流プログラムでは、インドの伝統医療や ASHA といったコミュニティ・ヘルス・ワーカーが活躍する独自の保健医療システム等について、社会文化経済的背景との関連を実際に見聞し、検討するという学修プログラムとなっている。また、SIU ではバディとして学生のアシスタントを配置することによって、学生同士が安心して交流を持てる環境を提供しており、プログラム受講学生からも好評であった。

2020 年以降は、COVID-19 拡大により渡航が困難となったが、オンラインでの国際交流プログラムを、1, 2 回/年実施し、2020 年度は 9 名、2021 年度は計 6 名、2022 年度は 8 名が受講・修了した。オンラインであっても、講義や学生のバディとの意見交換等に加え、伝統的かつ代表的な健康法の一つであるヨガの実践などもあり、充実した内容であった。なお、SIU は、千葉大学では看護学部のみならず、普遍教育課程において他学部学生に向けて国際交流プログラムを提供している。

GRIP プログラム実施に向けた 2022 年度の調整・連携

これまでのオンラインプログラム実施や学生派遣等の交流を踏まえ、SIU との学生交換を行うべく、SGS によるコーディネートを経て、まずは大学間協定締結を行った。2022 年 9 月 1 日付にて、シンビオシス国際大学と千葉大学との大学間協定が看護学研究院が窓口となって締結され、発効となった。SGS とも連携しながら SIU との国際部である SCIE との調整を継続し、同年 11 月には千葉大学より、GRIP 推進委員会メンバーが SIU を訪問し、SCIE と学生交換に関する具体的な打ち合わせを実施した。さらに、フィールド演習については、SIU ではすでにカリキュラムの一部として、大学近隣の施設や NGO にてサービス・ラーニングを行う Symbiosis Community Outreach Programme and Extension (SCOPE) を提供しており、同 SCOPE の担当教員との打ち合わせやフィールド演習候補である村などの視察を行った。さらに 2022 年度は初回でありかつトライアルとして、SIU からは SCON Symbiosis College of Nursing 看護学部/看護学研究科の学生を千葉大学に派遣するとこととなった。SCIE の案内にて、学生の宿泊場所や学習室などを視察し、調整を行った。以降は主にメール等にて調整を継続した。

2-3-2. レスター大学（イギリス）

これまでの本学/部局との交流の経緯

レスター大学（University of Leicester: UL）は千葉大学医学研究院との間で部局間協定

を締結しており、2005年に初めてレスター大学からの教員の訪問があり、以降、定期的な交流を継続している。本学の亥鼻 IPE プログラムの企画段階より、レスター大学教員によるコンサルテーションを受けてプログラムを発展させてきた経緯がある。本学医学部、看護学部、薬学部との合同の IPE 授業の一環として、看護学部からも 2019 年に 4 年次学生 2 名、医学部 6 年生 1 名をチームとして、UL 現地に派遣した。現地でのプログラムは、日本の包括ケアシステムのモデルともなっている integrated care(統合ケア)について学ぶ integrated care block(ICB) と呼ばれるカリキュラムであり、本学医学部学生ならびに看護学部学生は、現地の医学生らとともに講義や臨床実習に参加した。同大学でのこの ICB は、地域で暮らす高齢者や障害者など慢性的で複雑な健康上のニーズを持つ人々を対象として全人的に評価・診療する能力の涵養をめざすものであり、地域において多職種チームの一員として効果的に働くために必要な知識・技術・態度を身に付けることなどを目的とする IPE プログラムである。ICB には、貧困地域での生活困窮者や路上生活者を支援対象とする診療所での臨地実習も含まれており、社会経済的背景や関連する政策等についても比較・検討する学修内容となっている。この ICB でのプログラムは、まさに GRIP の基盤とも言える内容となっている。2020 年以降は COVID-19 パンデミックによって、このプログラムは保留となっていたが、パンデミック後には学生交換を再開することとして、合意を得ていた。

GRIP プログラム実施に向けた 2022 年度の調整・連携

UL での GRIP プログラム開始のために、2023 年 1 月中旬に、本学より GRIP 推進委員会メンバーが現地を訪問し、ICB 担当教員らと打ち合わせ等を行った。2023 年度からの GRIP プログラムとしての学生交換の時期や人数、フィールド演習先となるフィールド等について検討した。その結果、UL においては ICB を基盤としてフィールド演習を行うこととなった。その後も具体的な調整を継続している。

2-3-3. モナシュ大学（オーストラリア）

これまでの本学/部局との交流の経緯

モナシュ大学は、1994 年より、千葉大学との間で大学間協定を締結している。また千葉大学大学院看護学研究院附属の専門職連携教育研究センターの教員は、モナシュ大学での IPE プログラムを視察するために 2012 年に現地を訪問した。その際に、スチューデント・クリニック、デジタル診療および E ラーニングシステムなどを見聞し、亥鼻 IPE プログラムの改善のための参考とした。また、2020 年にグローバル IPE の一環として、IPERC が中心となって 3 名程度の派遣および受け入れを行う事として、そのためのプログラムも開発していたが、COVID-19 パンデミックにより中止となった。実渡航を伴う派遣および受入は不可となったが、グローバル IPE および Global Health and Nursing II の授業の一環として、オーストラリアにおける看護活動等についてオンラインでの講演をモナシュ大学教員に提供してもらうなど交流を継続している。